
暗き闇夜に差す光2

No.6

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

暗き闇夜に差す光2

【Nコード】

N3872E

【作者名】

No.6

【あらすじ】

暗き闇夜に差す光の第2部。内容は、高校の入学式の時、火祭という光の知り合い、てっさんの子供に出会う。その火祭とも仲良くなったのはいいが、天涅の家で夜中に祖父と母がこそそと自分のことについて話しているのを聞いてしまう。何を話しているのかきになって不安になってしまう天涅だが・・・。

第2部

四

「ハァー。」

独り寂しく、チャコの小屋の前で溜息をついた。クウーンと心配そうに見てくるチャコ。

「お前だけだよ。俺の事心配してくれるの。」
そう言って、頭をなでてやった。

朝の光が差し込む庭で何をやっているのかというと、チャコに餌をあげているのである。ついでに、家にいづらいので、さっさと中に入らずにチャコの朝食シーンを見ている。

「昨日は参ったよ。帰ったら父さんに怒られるし、じいちゃんには冷たい目線を投げかけられるし、あいっ（弟）にはバカにされるし。全く、俺ってかなり不幸だよな。」

しかし、今度はペロペロと食後の水を飲むのに夢中になっていて、チャコからの反応はなかった。

「お前まで……。いいよ、どうせ俺なんて。」

がつくりと肩を落とした。なんだか、朝っぱらからこんな事を言っている自分が惨めになってきた。

すると、誰かが玄関を開けて、パタパタと走ってきた。

「天渥兄ちゃん。」

振り向くと妹だった。

「今日ね、学校に必要なもの買いに行くって。」

「学校に必要な物？」

「えーとね、制服とか、文房具とか。あつ、デパートに行くんだけどね、服も買ってくれるかもって。」

ニコニコと嬉しそうに言った。

「ふーん。（そういえば、光は制服とかどうしてるんだ？ やっぱあ

のじいちゃんと買いに行くのか？」

ふとそんな事を考えていると、水を舐め終わったチャコがワン、と吠えた。

「ひゃっ！」

普段よりもっと高い声で、驚いたように妹が叫んだ。

「そんなに恐がるなよ。可愛いじゃないか、チャコ。」

「え、チャコ？ 梅子じゃないの？」

違う意味で驚く妹。

「梅子ってビミョーじゃん。チャコの方が似合ってる。」

「でも、いいの？ 梅子ってじいちゃんが決めたんじゃないの？」

「いいの。俺が世話係りなんだから。な、チャコ。」

そう言うと、またワン、と吠えた。またまた驚く妹。もう丸つきり逃げ腰である。

「べ、別にいいけどさ。とにかく九時にいくっていったから。ちゃんと準備しとけて。」

それだけ言うと、さっさと中に入ってしまった。

「九時か。後一時間もある。もう少しいよ。」

しばらくチャコと遊んでから、家の中に入った。

それから九時きっかり、父の運転する車に乗って、祖父以外の全員で出かけた。

三十分程走ると、市内に入り、大きなデパートが目に入った。どうやらここでもほとんどの物は買えるらしい。

まずは、近所の学校なら小、中、高と制服が売っている階へ行くことにした。すると、そこで思いもかけない人物に出会った。一瞬見間違いかと思って通り過ぎようとしたが、そうじゃないことに気が付き立ち止まった。髪の毛に所々金が交ざっていて、耳にピアスをしていて外見だけ見たら不良そのもの。しかも昨日、初対面なのに色々話して仲良くなった、その名も光がいたのだった。高校生の制服コーナーの所で選んでいるようだった。

「俺、制服探してくるから。」

そう親に言って、光のところに近づいて行った。

「光。」

名前を呼ぶと、相手も驚いたようにこちらを見た。

「天涅？奇遇だな。」

「うん。今日家族で学校に必要なもの買いに来たんだ。光は独り？」
そう聞いたとたん、ぬっと後から人が現れた。

「うわっ！」

思わず驚いて、その人を見上げた。やけに背が高く、筋肉質な体を革ジャンでおおっていた。見たところ、自分の父親と同じ歳ぐらいかと思われた。

「そんなに驚くなよ。この人はてっさん。じいちゃんの元子分で、オレの父親代わりみたいな人。」

光に紹介されたてっさんは、ドスの聞いた声で話し掛けてきた。

「ほう、君が天涅君か。光から話は聞いているよ。これからよろしくな。」

手を差し出してきた。内心ビビりながらおずおずと手を差し出すと、強い力でギュッと握られた。

「イタッ！」

「ああ、すまんすまん。このぐらいの年の子は光しかいなくてな。ついつい力の加減を忘れてしまう。」

言ってからてっさんは、ガハガハと笑った。

「悪いな。仕事上許してくれ。」

こそつと耳打ちされた。握られた手をさすりながら分かったと頷いた。

それより光はどれだけ力が強いのだろうか。体型は自分とあまり変わらないように見えるのに、実はかなりの筋肉質とか？

「なあ、せっかくここ出会ったんだから、時間決めて待ち合わせしようぜ。昼はおごってやるよ。」

「え、でも待ち合わせってどこで？」

「一回のカフェテラス。行ったらすぐわかるよ。時間は、今が九時四十分だから、十一時でどうだ？ そっちの買い物もそれぐらいには終わってるだろ？」

親が許すかどうか少し考えたが、許してくれるだろうという事にして、約束をした。

それから制服を、光と一緒に選んで別れた。

制服を親に渡すと、父に怪訝な顔をして聞かれた。

「さっきのは友達か？」

「うん。そんなもん。」

「あら、天涅にこんな早く友達できるなんて凄いじゃない。」

「でも、なんかあの人柄悪いよな。」

弟が目をすがめて言った。

「見かけで判断するなよ。あいつがどういう奴かもしれないくせに。」

弟に言ってやると、フン、と鼻で返された。かなりバカにしている。
「ねえねえ、さっきの人天涅兄ちゃんの友達なの？ なんかカッコイイね。」

すると妹が、微かに頬を赤らめて言った。全員驚きである。

「お、おい、咲。お前はああいうのが好みなのか？」

慌てて言う父。ああいうのってどういう意味だよ。そりゃあ、外見はああだけど…。

「でも、確かにカッコイイ顔してたわね。母さんも分かるわ、咲。」
この発言にはまたまた驚きである。

「か、母さんまで。大丈夫かよ。」

顔を思いっきりしかめて言う弟に、ヒラヒラと手を振ってジョーダン、ジョーダンという母。結構本気に見えたのは気のせいだろうか・
・。

「ねえ、何の話してたの？」

興味津々に聞いてくる妹。俺はハツとして、約束の事を思い出した。
「あ、そうだった。十一時に一階のカフェテラスで会う約束したん

「だけど、いい？」

そう聞くと、初めはしぶい顔をしていた父だったが、母の、友達関係は大切よという一言でしぶしぶOKをしてくれた。ひとまず安心するのだった。

そして十一時。なんとか買う物は全て買い終わって、待ち合わせ場所に行った。光が言った通り、カフェテラスはすぐわかった。一階の半分程度がそれでうまっていたからだった。

中に入ると、店内にはいなかった。まだ来てないのかと思ったが、外にも席があるのに気付いて行ってみた。すると、その日当たりのいい場所に光とてっさんがいた。

「お、来たか、天涅。ここ座れよ。」
自分の隣を指す光。

「このクリームスパゲッティうまいんだぜ。天涅も食うか？」
特に何を食いたいというのはなかったので、光のオススメを食べようと思い、頷いた。

「てっさん、クリームスパ二つね。」

「わあったよ。」

そう言って、近くにいた店員を呼んで注文をした。

「クリームスパゲッティ二つと、ブラックコーヒー一つ。」

「かしこまりました。」

頭を下げて、店員は店内に入って行った。

「てっさん、ブラック好きだよな。」

光が呆れるようにして言った。

「男にはなあ、苦さってもんが必要なんだよ。」

渋く言うてっさん。どこか決まっている。

すると、光がこそつと耳打ちしてきた。

「てっさんブラック飲んでるけど、実は和食しか食わないんだぜ。おかしいだろ。」

えっ、と思っていると。ドスの利いたてっさんの声が聞こえた。

「おい、全部聞こえてっぞ。」

俺は内心かなりビビッた。身近にこんな声を出す人はいないのでなおさらだった。

「まあまあ、てっさん。これぐらいいいじゃん。それに天涅ビビッてるって。」

「ったく、お前ってヤツは。すまん、天涅君。いつもこんな調子だからよう。」

てっさんが笑って言った。だが、目は笑っておらず、鋭い光を放っていた。ヤクザって皆こうなのだろうか。

「あ、そうだ。天涅、昨日帰った後お前のじいちゃんどうだった？いきなり聞かれ、昨日の事を思い出す。光の家から慌てて帰って、良い事は全然無かった。」

「じいちゃんからはほぼシカト。それに、父さんに怒られた。」

「シカトされたうえに怒られたのか。ん？でも、何で怒られたんだ？まだ五時過ぎたばかりだっただろ。お前んとこの門限何時だよ。」

「ああ、そうじゃなくて、俺、家飛び出して来たっていっただろ。いきなり出て行ったのにいつまでも帰ってこなかったからって怒られた。」

肩をすくめて言った。昨日の父さんの怒り方を思い出すと、思わずそうせざるを得なかった。

「へえー。でも、ちゃんと心配されてんじゃん。」

光が意外というように言った。でも、俺は思いつき頭を振って否定した。

「心配してんじゃない。ただ、怒鳴りたかっただけだって。じいちゃんが亡くなってから、機会があったら俺の事怒鳴るようになったから。」

「天涅って、恨まれてるよな。」

光が肩にポン、と手を置いて言ってきた。

「まあな。でも、別にいい。俺は恨まれるような事したから。目を伏せて言った。」

「本当に別にいいのか？やっぱオレは納得できない。」

俺の肩から手をどけて、腕を組んで首をかしげた。

「なんで光が納得できないんだよ。昨日も言っただけど、俺が納得しとけばいいじゃん。」

「そりゃあ、そうだけど。いや、そうなのか？何にしても、いくらなんでも自分の息子のせいで父親の死に目に会えなかったぐらいでそういう態度とるか？オレは親なんていないから分かんねーけど、オレが親だったら、それぐらいで息子を恨むなんて事はしねえけどな。天涅だってそうじゃないか？」

真直ぐな視線で問い掛けてきた。その問いは、自分で幾度か考えたものだった。でも、考えても埒があかないので考えるのをやめにした。そして、父の怨みを買って出る立場に立ったのだ。それで納得したんだからもういいのだ。この事はもういいのだ。

「天涅？」

黙りこくった俺に、光が心配げに名前をよんできた。俺は、そんな光を見て言った。

「その事は本当にもういいんだ。俺が納得したんだから。」

すると、諦めのつかない表情で、そっかと言って視線をそらした。

しばしの沈黙。何か話題は無いかと考えていたら、光を見た時の母と妹の事を思い出した。

「そういえばさっき上で会っただろ？その時俺の家族も光を見たらしくて、光と別れた後、妹がいきなりカッコいいヒトだったねって言い出してさ。しかも、母さんまでもそうねってのってくるから驚いたよ。」

「驚いたのか？！オレはそっちの方が驚きだけど。」

光の言っている事意味が一瞬分からなかった。でも、良く考えてみれば今の発言は、自分がかっこいいの知らなかったのかって言っているのと同じ意味だと理解できた。

「おいおい光。いくらなんでも自分で言う？」

呆れて言う、今度はてっさんが驚きの発言をした。

「天渥君。実は光はモテるんだよ、これが。俺ら男から見たら分らない魅力があるらしい。」

「えっ?! 何ですか、それ。」

本気で驚いた。大体、男から見たら分らない魅力って何?

「天渥、驚きすぎだって。一ついっておくけどな、オレ、中学の時にもらったラブレターの数は千通近いぜ。」

「マジで?」

またまた驚く。大体、千通ってどれだけの女子に好かれていたのか…。

「あ、でも、彼女は独りもいなかったけどな。」

てっさんが、光をニヤニヤ笑いながら見て言った。

「どういうことですか?」

それは有り得ないだろ、と密かに思いながら聞いてみる。

「実はな、組長がそういうのにうるさくて、いわゆる硬派だからよ。本気で付き合いたいって思う相手に来るまでは付き合うなって言われてるってわけよ。いくら光でも組長には逆らえないからな。」

「へえー。じゃあ、千通近くラブレター貰ってるのに、その中にそういうヒトいなかったんだ。」

「まあな。ていうか、オレは別に付き合いたいなんて思ってなかったんだよ。それに、こっちはこっちで自分の立場守るのに精一杯だったっての。」

「自分の立場って何?」

「親がない。しかも捨て子。その上、拾ってくれたじいちゃんは元組長。それが全部学校に筒抜けになってるんだ。勿論、教師に目つけられてた。じいちゃんは気にするなって言ってたけど、普通気にするだろ。」

それに、陰険な教師とかいてよ。そいつにキレテ殴ったことあるんだ、オレ。そんな時いろいろと問題になって、じいちゃんは、元の組で押しかけだなんていうからオレ呆れてさ。そしたらてっさんがなんとかいいちゃん抑えてくれてその時はなんとかあったんだけどな。

それで、結局オレは違う学校に転入したんだ。そこでも勿論目をつけられた。しかも、教師殴ったっていう経歴まであるから、今度は何も起こらないようにって見栄張って優等生面したんだ。思いつきの猫かぶり。

でも、それで学級委員長とかもやって、中三の頃は学生会長にもなったんだぜ。信じられねーだろ。しかも、外見から変わろうと思って、伊達眼鏡かけて、髪は黒くして短くしてさ。しんどかったけど、それなりに充実してた。学校では優等生。家に帰ったらボロ丸出しの二重人格っぽい生活してたな。疲れたけど、なかなか良かったんだぜ。でもやっぱ、高校は校則自由で、学校自体の雰囲気もフリーって感じの柏高に入れるんだからスッゲー気が楽。天涅も良かったな。気が楽な学校受けさせてもらえて。」

二ツと笑って光が言った。

「本っ当、光ってよくしゃべるよな。」

「まあな。そうかも。つまんねーよな、自分の事ばっか話して。」

「いや、俺が体験してない事ばかりだから全然つまらない。それに俺、話すより聞く方が良いし。」

正直に言うと、光が、目をぱちぱちと動かして、何度か瞬きをした。

「なんか天涅って良い子だな。」

そう言って、よしよしと頭を撫でてきた。

「って、おい！何すんだよ。大体、良い子ってどういう意味だよ。」
頭の上の手を払いのけて、半目で睨みつつ聞いた。

「ただそう感じただけ。天涅ってあんまり他人ひとの悪口とか言わないだろ？それに、否定もしない。今までいなかったタイプって感じ。」
光に言われて初めて気付いた気がする。確かに自分は、他人の悪口も言わなければ、否定もしない。でも、それは良いように考えたらの話だ。

本当はこういうの臆病っていうんじゃないだろうか。他人を傷つけて、自分にとばかりが来ないように悪口を言わないとか、否定をしないとかそういう事を自分は考えている。

「俺は、光が思ってるような奴じゃない。そんな良い奴じゃないんだ。」

ボソッと呟きに近かっただろう。だが、光はちゃんと聞き取ってくれたらしく、言葉を返してきた。

「やっぱ天涅って今までにいなかったタイプだな。自分の事そんな風に否定する奴なんて、そうそういないぜ。でも、あんまり否定するなよ。いくら自分のことでも、他人に言われて気付くことってあるんだからよ。もうちょっと他人^{ひと}が言った事を素直に受け止めてもいいんじゃないか？」

なっ、という感じで笑いかけてくる。俺は、どう反応したらいいかわからず、ただその笑みを見ていた。

すると、店員が注文した品を持ってきた。

「クリームスパゲッティ二つと、ブラックコーヒーになります。」

どうぞ、ごゆっくり。」

そう言って、去って行った。

「お、やっと来た。」

光が嬉しそうに言って、クリームスパゲッティを口に運んだ。

「うっめえ。やっぱパスタはここのに限るな。天涅も食えよ。」

言われて、一口食べてみた。

すると、口の中にトロッととろみのある濃厚なクリームが広がった。麺のやわらかさも丁度良く、確におもしろかった。

それから、しばらく無言で食べつづけた。そして、そろそろ飽きてきたなあとと思った時に、丁度食べ終わった。

「量もぴったりだ。」

そう言くと、光が物足りなさそうな表情をして言った。

「そうか？オレはもうちょっとほしいな。二杯目まではいかないけど。」

てっさんは、苦そうにブラックを飲んで、呆れ顔で光をみて言った。

「よくそんな味の濃いのが食えるな。まだまだガキだな。」

「うるさいな。オレはてっさんみたいにおっさんじゃないんでね。」

そんなブラックを苦々しげにのめねーよ。」

フン、と鼻で笑って言った。

「ったく、よく言うぜ。」

そう言っただけで、つさんはぐいっとなに残りのブラックを飲み干した。やけに苦そうだった。

それから、帰ろうということになったのだが、光がトイレに行きたいというので、つさんと二人で待つことにした。

「天涅君。」

「はい？」

「あつけがましいと思うが、光をよろしく頼む。」

いきなり真面目な顔をしたでつさんに言われた。よろしくって何で？
「あいつな、小さい頃から見栄っ張りなんだ。さっきも聞いたと思うけど、親のいないことや捨て子だって事を言われてきたんだ。でもさ、そんな周りの目を気にせずに、強く生きてきた。」

あいつは空元気は見せても本当の笑顔はなかった。でもな、天涅君にあつてからなんか本当に楽しそうなんだ。天涅君の事話す時、今まで見た事ないぐらい嬉しそうな顔してるんだ。あいつにとってそれほど天涅君の存在はデカイんだ。だから、光の事を見放さないでほしい。頼むな。」

でつさんは俺の目を見て、返事をするのを待った。その目には鋭い光りはなく、温かい光りがやどっていた。亡くなった祖父のような優しい目だった。でつさんは本当に光を大事にしてるんだ、と思った。直接話したわけじゃないけど、目を見ただけで分かるのだから不思議だ。

「天涅君。」

でつさんはじつと俺を見て、返事を促した。

「分かりました。絶対、光を突き放すようなことはしません。」
自信を持って答えていた。でも光なら、となぜか思えた。

それから光が来て、でつさんの運転する車に乗り込んだ。
家に送ってくれるという事だったので、遠慮なくお願いした。

そして家に着くと、そのまま光達とは別れるかと思っていたが、光が車から降りた。

「てっさん。オレ後で帰るから荷物とか家に置いといて。今日はありがとな。」

「おう。」

そして、徹さんの車は光の家の方へ去って行った。

「何で降りたんだ？」

「ちょっと、天涅と散歩しようと思って。あの犬連れてこうぜ。」

光がさす先には、チャコがいた。

「天涅あんまりこころ辺知らないだろ。散歩がてら教えてやるよ。」

「え、あ、うん。ありがと。じゃあ俺、親に言ってくる。すぐ来るから待ってて。」

そして、家の中に入って母にその事を告げると、何故か妹と一緒に玄関までついてきた。しかも、わざわざ玄関を開けて庭にまで出て来た。何事かと思っていたと、どうやら光目当てだったらしい。その当人はというと、チャコの遊び道具で、一緒に遊んでいた。

「天涅兄ちゃん、声かけてよ。」

キュッ、キュッ

と、ジャンパーの裾を引っ張って妹が言った。俺は仕方なく、光と呼んだ。すると、よう、と手を上げて近づいて来た。

「どうも。お母さんに、えっと、妹ちゃん？」

首をかしげてにっこりと微笑んだ。なんだか光じゃないみたいだった。

「あ、あの、咲です。」

妹が、光を見上げて言った。

「天涅の母です。光君よね。いつでも家に遊びにいらっしやい。大歓迎よ。」

母がやさしい声音で言った。全く、何なんだこの雰囲気は。

「それじゃあ、お言葉に甘えさせていただきます。でも、今日は天涅と一緒に散歩に行ってきますね。それじゃあ、また。お母さん、

咲ちゃん。」

そう言って、何故かウィンクまでした。俺は寒気がしたが、母さんと妹は熱が出たように頬が赤い。

「ほら、二人とも。風邪ひくから早く中入って。」

光を見つめつづけている二人を、なんとかして家の中に入れた。

「ったく。光、何いきなりキャラ作ってんだよ。ビックリするじゃないか。」

「ちよつとしたサービスだって。でもこれで信じただろ。オレがモテモテだって。」

フン、とちよつとキザっぽくしてみせた。そんなに俺が信じていないと思っていたのか、それともただの自慢か？両方だという事にして、俺は無言でチャコを小屋から出して、首わび紐をつけて、

「さっさといこう。日が暮れちゃう。」

と言って歩き出した。

「って、行くのかよ！なあ、信じただろ天涅！！」

「分かったって。信じた、信じた。」

棒読みで言うと、光が半目になった。

「本当か？」

「本当だって。光がキザなのは充分に分かった。」

「キザって何だよ。」

「キザじゃん。で、どっち行くの？」

「ちえっ、はぐらかしやがって。こっちだよ！」

不機嫌そうに言って、光るの家に向う方とは、反対方向に歩き出した。大またで、ずんずん歩いて行く光をみていると、思わずくすくと笑ってしまった。なんだか小さい子がすねているみたいに見えたからだった。

「何だよ。」

くるっと振り向いて、まだ不機嫌な顔のまま言った。その顔もおかしくて、今度はハハハハ、と声を上げて笑った。すると光が、不機嫌だった表情をもっと不機嫌にした。

「何なんだよ、天涅！お前ヒトの顔見て笑いすぎだぞ！！何がそんなにおかしいか言ってみろー！」

言いながら、俺の首を絞めてきた。結構強い力だったので、すぐギブアップした。

「ちょ、光。痛いって。言うから、首絞めるのやめろ！」
なんとか力を緩めた光から逃れられた。

「で、何がそんなにもしろかったのかな、天涅君。」

ニコニコと気持ち悪い程優しく微笑んだ。てっさんの鋭い目よりも何倍も恐ろしく見えた。

「あ、いや、だ、だからさ……。光の表情が^{かお}おもしろかったからつい……。」

言った瞬間、光の目が鋭くなってドスの利いてきた声を出した。

「天涅、オレの顔の何がそんなに面白いんだー！！」

そして、また首を絞めてきそうだったのでチャコの紐を引っ張って走りだした。

「待てー、天涅ー！」

「ひ、光、顔が恐くなってるってー！！」

逃げながら後ろを振り向くと、鬼の形相になっていた。

「何だと！！」

火に油を注いだようだった。お、恐ろしい……。でも、誰かとこんな風にできるなんて、なんだか不思議だった。祖父が亡くなって以来、自分はもう誰ともかかわりを持たないと思った。持つ資格がないと思っていた。

でも、それはただ単に恐がっていただけだったんだ。祖父の時みたいに、最後の最後でひどい仕打ちを相手にしてしまうんじゃないかって、恐かったんだ。だけど、光とはあっという間に仲良くなれた。恐れも感じなかった。だから、光には絶対に、祖父のときみたいな仕打ちはしない。そう決めた。これから、恐れなんて感じずに、楽しんでいこうと思った。

「天涅！」

「うわっ！」

ぐいっと、腕をつかまれた。

「お、お前、逃げ足速いな。」

「ひ、光こそ、足速いな。」

二人でゼーゼー、ハアハアと息を切らして言った。

「あー、くそっ、いきなり天涅が走り出すから追いかけちまったじやねーか。」

「だって、光が凄い表情で追いかけてくるから、つい。」

「ったく。でも、こんなに走ったの久し振りだった。」

「俺も。」

いつのまにか河川まで来ていたので、その場にどかっと座った。

「なんか、楽しかったなあ。」

光が寝転がって言った。俺も真似て寝転がった。すると、上からチヤコが不思議そうな顔をして覗き込んできた。

「なんかここで寝てー。」

「いいかも。」

まだ寒いはずなのだが、走ったので体が火照っていて、北風が涼しく感じられた。

「この河川結構いいだろ。オレのお気に入りの場所の一つ。覚えておけよ。」

「うん。光のお気に入りの場所まだあるの？」

「ああ。たくさんあるぞ。どんどん教えてやる。天涅もぜってー気に入るって。」

そう言うのと、ガバツと起き上がった。

「よしっ、やっぱ行こうぜ。寝てたら風邪ひきそうだし。」

もう少し寝転んでいたかったが、他の場所も見えてみたかったので起き上がった。

「じゃあ、行こうぜ。」

「うん。」

そうして、光と一緒に歩き出した。

それから光に、いろいろな場所を教えてもらった。どれも凄く良かった。だが、一気に覚えるのは難しそうだったので、これから少しずつ覚えていこうと思った。

引越してきた当初は絶望ばかりで溜息を何度もついていたが、光と会って、その絶望感は消え、前向きに考えようと思えるようになった。

少しずつ、心の中の闇が消えていく気がした。

五

ジリリリリリリ……

（何か鳴ってる……。非常用のベル？どこか火事にでもなったのか？家か？まさか母さんが料理を失敗して台所で火事が！？……。いや、待てよ。それだったら誰か起こしに来るだろ。火事じゃないか。てことは、何？この音。ベルっていったら他になんだ？あれっ、それより今何時……。って、もしやこの音は！！）
はっとして飛び起きた。そしてようやく、目覚し時計のベルを止めた。

「もう朝か。ん？そういえば今何時だ？」

時計の針を見てみると、長い針が十を指していて、短い針が八を指していた。

「八時十分！？」

あまりにも驚いて、いつもは抜け出しにくい布団から飛び出た。

「や、やばい。早く準備しないと！八時五十分集合なのに！！」

慌てて制服を取り出していると、ガラッと部屋のふすまを開けて、母が入ってきた。

「天淫！何してるの、入学式の日に寝坊だなんて。いつもはちゃんと起きるのに。早く準備しなさい！」

「い、今やってるじゃん！」

制服を慌てて着ながら言った。

今日は母の言ったとおり入学式である。柏高校の入学式は、まず九時から生徒だけ集めて入学式の予行練習を行う。そして、十時半から本番が始まる。親は、十時から式場である体育館に入れる。だから、親と子は別々に学校に行かないといけないのだった。

柏高校までの道のりは、光が教えてくれたので知っていた。かかる時間は約二十分。だから、三十分には家をでないといけないので、準備できる時間は、たったの二十分しかない。着替えている間に計算はできたので、いっそう慌てて、階段を駆け下りて行った。それから適当朝食を食べ、家を出た。

「あつ、後ジャスト二十分！！急がないと。」

腕時計を見て時間を確認して、走り出した。

学校に行くまでの道で、途中光の家を通り過ぎた。横目で見て走りすぎると、少し前を誰かが歩いているのが見えた。時間大丈夫なのかと思いつながら通り過ぎようとした。だが、通り過ぎる寸前顔を見て、思わず立ち止まっていた。

「光！！！」

「あ。おはよ、天涅。」

低血圧なのか、眠そうに言った。

「おはようじゃないよ！時間やばいの分かってる？」

「時間？今何時だよ。」

「八時三十五分。集合時間まで後十五分しかないよ。」

腕時計を見ながら言った。しかし、光は慌てる様子は無く平然と歩いていた。

「余裕だって。十五分もあれば楽ショーで着くから、そんなにせかせかすんな。高校生活の始まりなんだぜ。入学式ぐらいヨユーもってこうぜ。」

トントンと俺の肩を叩いて、光が言った。

「何でそんなに余裕なんだよ。ここから丁度十五分かかるだろ！」

「いや、十分以内に行ける。近道があるぞ。この間天涅には、正式なルートしか教えなかったけど、実は最短距離がある。でも、最短

距離にだけあって道は険しいんだよな。それにまだ時間あるし。」

「光！その最短距離と追っていかないとヤバイって！！」
そう急かすと、呑気に欠伸をした。

「あーあ、こんなにいい朝なのに慌てないといけないなんて。」

「光！！何呑気な事言っただよ！遅れたらまずいって！！」
光るの肩をゆすって大声で言った。

「あー、もう、分かったって。仕方ないな。天渥、近道は険しいけどちゃんとしてこいよ。」すると、いきなり光が歩道を反れて、わき道へと入っていった。本当に学校までたどり着けるのか半信半疑のまま、着いて行く事にした。

「ほら、ちゃんと着いただろ。」

わき道にそれてから数分後、あつというまに学校に着いた。

「ほ、本当に着いた。」

「あつたりまえだろ。じゃあ、早いとこ体育館行こうぜ。」
スタスタと歩き出す光の後を追っていった。

体育館の中に入ると、まだ予行練習は始まっていなかった。だから余裕を持って、体育館の半分を占めているパイプ椅子に座れた。それからしばらくして、一年生の担任の中でも一番責任を担っている先生が出てきて、予行練習が始まって行った。

そして、一時間後。親が入って来られる時間になり、生徒は休憩になった。

「眠かった。」

大欠伸をして光が言った。

「式なんてつまんないからね。早く本番終わらないかな。」
ぐいーっと伸びをして言った。

「だよな。本っ当につまんねえ。」

心底つまらなさそうな表情をして言った。

「にしても、やっぱりこの学校って規則自由って感じた。」

周りを見回すと、制服を自由に着崩している者や、髪を色んな色に

染めたり、ワックスを使って立てたりしている者がわんさかいた。

「あつたりまえだろ。じゃなきゃ、オレはここにいねーよ。」

「あれ、でも光ちゃんと制服着てんじゃん。髪はいつものままだけど。」

柏高校の制服はブレザーなのだが、着崩しているものは、ネクタイをゆるめたり、ボタンをとめなかったり、ワイシャツのしたに私服を着ていたりと様々なのだ。しかし光は、きちっとネクタイを締め、ボタンもちゃんととめていた。勿論、ワイシャツの下に私服も着ていなかった。

「ああ、これ？じいちゃんのせい。」

ネクタイに手をかけて、嫌そうに言った。

「どういこと？」

「うちのじいちゃんさ、こういう式とか重んじる人だからこういう時ぐらいいびしつとしてけって言うんだぜ。あゝ、息苦しい。」

「そういうことか。」

「ほら、後ろ見てみるよ。スッゲー目立ってるから一発で分かるだろ。」

言われて、保護者が座る席を見た。もう十時はずっと過ぎていたので、結構な数の保護者がいた。そして、光のおじいさんは、一番前の席の中央に陣取っていた。その席に座っていることからして目立っているのだが、そのうえ藍色の良く似合う和服を着て、はすに構えているものだからよけい目立っていた。

「確かに目立ってる…。ていうか、周りの人達ひいてない？」

「毎回あんな感じだけだな。天渥の親は来てるのか？」

「うん。母さんが来てると思う。」

言いながら探してみるが、中々見あたらない。

「そういえば昨日の夜、母さんがさ、冗談かどうか分からないけど、明日光君に会えるわって喜んでたよ。」

「へえー。さすがオレ。でも・・・。」

得意満面な表情をしてから、眉を寄せた。

「でもって？」

「周りを見てみろよ。全員男だぜ！」

左右をキョロキョロ見て、衝撃を受けたように言った。

「もしかして、男子校だって知らずに受けた？」

「もしかと思って聞いてみた。」

「当ったり前だ！高校生になったらぜってー彼女つくるって思ってたのに！！」

「……………」

かけてやる言葉も無く、衝撃を受けて叫んでいる光をただ見ていた。と、その時、誰かが前を通ろうとしたのか、足を思いっきり踏まれた。

「いたっ！」

思わず顔をしかめて、踏んだ相手を見上げた。相手はまさに不良ですと言わんばかりの奴だった。髪は茶色に染め、両耳にピアス、指にはリング、手首には柄の悪いリストバンドをつけていた。そして目は、悪びれた様子も無い、冷たさしかなかった。

「邪魔なんだよ。」

「おい、自分で踏んでおきながら邪魔はないだろ！」

光が椅子から立ち上がって、睨みつけて言った。

「何だよ。てめえは関係ねえだろ。」

光に負けないぐらい睨みを利かせて相手が言った。

「ちょっと光。」

今にも手を出しそうな光を、寸でのところで止めた。

「何だよ、天涅。止めんな！今のはこいつが悪いだろ！」

光が本気で怒っているように言ってきた。

「でも、わざとって訳じゃないんだから……………」

「そんなのわざとに決まってるだろ！おい、謝れよ。今すぐ天涅に謝れ！」

相手にぐいっと近づいて言った。

「バツカじゃねーの。こんな事でいちいち熱くなりやがって。」

がしつと、光の胸倉を掴んで言った。

「てんめえっ。」

光も負けじと、相手の胸倉を掴もうとした。

「光っ！」

「やめんか！」

慌てて止めようとした時、誰かの声と重なった。

「「えっ？」」

光と一緒に、声を上げていた。

「全く。何をやっているんだ、お前は。」

ゴツンと、光の頭の上に拳が飛んできた。一体誰かと思ったら、なんと光のおじいさんだった！

「じいちゃん！？何で？」

心底驚いて、光が言った。結構、頭痛そうだったのに大丈夫なのだろうか。

「冷静にならんか。周りがどれだけ見ているか分からんか！変な意味で目立つなと言っているだろうが。今朝も言っただろ。そしたら自分は冷静に判断してるからそんな事にはならないとほざいておったのはどこのどいつだ、このバカタレが！！ 天涅君の方がよっぽど冷静じゃないか。」

「・・・すいません。」

冷静になった光が頭を垂れて言った。

「それに、そこのお前。さっきのはわざとだろう。悪いことをしたら、謝らないといけないって親に教わらなかったのか？」

「はっ、何だよじいさん。いきなり出てきて説教か。何様のつもりだよ！」

ますます怒って、光のおじいさんに手をあげようとした。危ないと思った時、倒れたのは光のおじいさんではなく、俺の足を踏んだ奴の方だった。

「えっ、今何が…？」

啞然としていると、光の呟きが聞こえた。

「へっ、ざまあみろ。じいちゃんに手をあげるなんて何百年もはえーんだよ。」

「近頃のガキは教育がなってない。お前もまだまだ教育が足りなかったみたいだな。帰ってから覚悟するんだな、光。」

そして、扇子を開いて、パタパタ扇ぎながら席に戻っていった。

倒れたやつはというと、悔しそうにしながら走って行った。

すると、周りからパチパチと拍手が起こった。ここ（体育館）にいるほぼ全員が、先程の騒ぎを見ていたらしい。

「うっわー、やべーよオレ。もう死んだも同然だ。じいちゃんが、覚悟しとけて・・・。」

椅子に沈み込み、頭を抱えて光が言った。その周りだけやけに空気がよどんでいた。

「光。ご愁傷様。」

手を合わせて言うのと、光がショックを受けたような表情をした。

「あ、天涅、オレを見捨てるのか。まさか、こんな奴だったなんて。ああ、オレってなんて不幸な奴なんだー！！」

「大げさだって。大体見捨てるって何。俺何もしてやれないじゃん。」

「そんな事言うなよ。今日天涅の家に泊めて！じゃないとオレ殺される。」

半べそをかいて光が言った。まさか、こんな光をみられるとは。光のおじいさんは、どれだけ恐ろしいのだろうか。

「まさか殺しはしないだろ。ていうか、そんなに恐いのか？」

「ヤバイ、かなりヤバイんだぞ！あ、あの恐ろしかった思春期。誰にでもあるだろ、親とか先生とかに反抗したくなる時期。オレはその時期にじいちゃんの恐ろしい教育を受けたんだ。この前話しただろ。親がいないとか、捨て子だって言われるって。その時すごく辛くて、じいちゃんとも口きかなくなったって。でも、その時は優しく接してくれたんだ。でも、思春期は違った。あの時は、思い出すのも恐ろしいぐらいビシバシやられて、根性叩きなおしてやるって

言われて、ほぼ毎日のように長い説教、てっさんとかかなり強くて
恐い人達と組み手っていうかケンカをさせられてたんだ。中三の受
験シーズンまで続けられてて、それ以降は全くやってなかったのに
！まさか高校生活初日から再スタートするなんて！！お、恐ろし
すぎるー！！！！」

ますます沈み込み、空気を重くさせた。

「光。恐ろしいな、それは。でもやっぱ、俺は何もできない。」

「何で！？」

「だって、そんなにおそろしいのに、俺が光をかくまったとなると
こっちまでとばかりきそうじゃん。」

「あ、あ、あ、天渥のバカヤロー！！そんな奴だなんて思いもしな
かったぜ！オニ、アクマー！！」

チャコみたいに吠えまくった。表情がコロコロ変わって、見ていて
おもしろい。だが、冗談もここまでにしなれば。

「光、冗談だよ、冗談。光のおじいさんはさ、光の為を思ってやっ
てくれてるんだから。光をやりたい放題に野放しにさせてたら、も
しかしたらさっきのあいづみみたいになってたかもしれないんだ。そ
うやって考えたら光はおじいさんがいてくれて良かったじゃん。」

「そうか？そんなもんか？」

また表情が変わった。今度は考えている表情^{カオ}になった。

「そうだって。おじいさんに感謝しなきゃ。」

光の肩に手を置いて、ポンポンと叩いた。

「うーん、天渥の言う事も正しい気がしてきた。そうだよな、オレ
の為にやってくれてるんだもん。」

うんうんと頷いて言った。かなり単純だという事が分かった。

「じゃあ、光。今日は家にちゃんと帰ろう。」

「うん・・・って、オレがこんなに単純だとも思ったか！！」

いきなり怒りの形相になった。

「えっ。」

単純だと思ったが、ただ単にのっていただけだったらしい。なんか

ムカツクなあ。

「オレは絶対帰らないぞ。天涅が泊めてくれなくなったら、どこかに泊まるさ。」

「本気かよ。」

「当たり前だろ！あんな恐ろしい事二度とごめんだ。」

「そうですか。はい。」

「はいって溜息！？おい、天涅どうしたんだ？天涅ってば！」

光に肩をゆすられながら、さっき言った事が通用しなかったのが悲しくなる俺だった。

それから入学式が始まり、クラスが発表された。式後、クラス別に別れて、解散をした。

「やっと終わったー。」

学校の門から出て行きながら、光が言った。

「同じクラスになれてよかったね。」

「ああ。ここ10クラスもあるからどうなるかと思ったけどな。なあ、それよりおれ今日どうすればいいんだよ。家に帰りたくない……。」

またぐちぐちと言い始めた。そんな光に呆れながら溜息をついた時。

「天涅。」

いきなり後から声をかけられた。振り向くと、母さんがいた。

「光君、こんにちは。」

「こんにちは。」

にこっと爽やかに挨拶をした。さっきまでの不快そうな表情と一瞬にして変わった。本当に驚くほど表情が変わる奴だ。

「制服よく似合ってるわね。」

「ありがとうございます。」

笑顔を決やさずに話す光。

「光君はご両親が来てるの？」

事情を知らない母が聞いた。母に光の事を言ってなかった事を後悔

した。

「じいちゃんが来てるんです。和服着てたんですけど、見ました？」

「ああ、見た見た。着物着て、扇子持ってた方よね。あら、噂をすれば。」

母が光の後ろを見て言った。光が振り向かず走り出そうとした時、静かだが厳しさを混ぜた声が聞こえた。

「光。」

「じ、じ、じいちゃん！！どこにいたのですか？」

ひきつった笑いをした光が聞いた。動揺しているのか言葉遣いがおかしい。

「今までお前の担任の所にいつていたんだ。」

「な、何で?!」

「何でって、いろいろ言う事があるんだ。それにさっきの事もあったしな。光、覚えてるだろうな。帰ってから・・・。」

「お、覚えてるから。ちゃんと覚えてるからそれ以上口にしないで！！」

自分の祖父の言葉を遮り、両手を前に突き出して言った。本気で怯えている。

「あのー、光君のおじい様ですか？」

母がやや怯えて、おずおずと丁寧に見ねた。

「ああ、そうだが・・・。おお、天渥君。ということは、あなたは天渥君のお母さん？」

逆に尋ねられて頷く母。

「ええ、そうです。この間は息子がお宅にお邪魔した様で。お世話になりました。」

「いや、こっちこそ。光が天渥君にべったりで、いつもお世話になってますよ。」

「ちよっと、じいちゃん。天渥にべったりって何だよ。別にオレは・・・。」

しかし、光は最後までいえなかった。おじいさんに口を塞がれたの

だった。

「こら、光。黙っとらんか。すいませんな、こんな孫で。」

「い、いえ。賑やかそうでいいじゃありませんか。」、
本当にそう思っているのか怪しい言い方だった。

「ねえ、母さん。そろそろ帰ろうよ。光の家通るから、途中まで一緒だし。」

こそっと母に耳打ちをした。

「そ、そうだよ、じいちゃん。早く帰ろう。」

口を塞いでいた自分の祖父の手をどかして言った。

「そうだな。早く帰って、もう一度教育しなおさないとな。」

「げっ……。」

苦虫を何百匹もつぶしたような顔をして言った。

「光、頑張って。」

「天涅。オレを匿って!!」

「無理だって。ちゃんと教育を受けてくるんだ。大丈夫、光なら耐えられる。」

「そんな棒読みに言われても……。」

がくつと項垂れた。そんな光の肩を軽く叩いて、歩き出した。光も、後からトボトボと歩いてきた。

そして、光達との別れ道にさしかかった。

「それじゃあ、また。」

「はい。お気をつけて。」

母が、ぎこちなく光のおじいさんに頭を下げた。

「天涅。」

今にも泣き出しそうな顔をして言ってきたが、どうする事もできない。

「光、また明日な。ちゃんと耐えるんだぞ。」

爽やかにそう言って、背を向けた。後で光が何か言ったが、聞こえないふりをして母と並んで歩き出した。

「天涅。」

少し歩いてから母に名前を呼ばれた。

「何？」

「光君って、ご両親元々いないんだって？」

「うん。」

「捨てられたんだって？」

「そうだけど、母さんさっき光のおじいさから聞いてたじゃん。何でいちいち俺に聞くの。」

そう言うと、何故か眉を寄せて唇を引き結んだ。何か重大なことを考えている時の母の癖だった。そして、一時経ってから口を開いた。

「天涅、光君から聞いてるんでしょ。その事詳しく話して頂戴。」

「詳しくって言っても、光だっておじさんから聞いたって言うだけ。」

「いいから、聞かせて頂戴。」

いつにない真剣な母の様子に少し戸惑いながら、光から聞いた事を思い出しながら話した。

「・・・そう。そういう事だったのね。」

話し終わってから、母がそう呟いた。

「どうしたの、母さん。光の事がそんなに気になるの？」

何故そんなに真剣なのか全然分からなかった。

「なんでもないの。ちよつと光君のおじい様から話を聞いて、気になっただけだから。あ、そうだ天涅。お腹空いてない？肉まん買ってこっか。」

はぐらかすように言って、近くのコンビニに入って行った。母の言動が気になりはしたが、話してくれそうになかったのであえてきけずにおいた。

その日の夜中。喉がやけに渴いたので目を覚ました。時計を見ると、1時をまわっていた。こんな時間に喉が渴く事はあまりないので、一瞬夢かと思った。でも、夢にしてはリアルだったので、頬をつねってみた。

「痛い。ふわあああ。夢じゃないか。」

現実だというのを確認して、とにかく台所に行って水を飲むことにした。

廊下と、階段の電気をつけて下に下りて行った。台所は居間を通り過ぎないといけないので、居間のふすまを開けようとした。と、その時。居間の前の部屋である祖父の寝室から、母の声が聞こえてきた。こんな時間に何をやっているのかと気になって、耳をふすまにあてた。

「ちよつと待って、お父さん。それって……って事？」
重要な部分が聞こえない。一体何を話しているのだろうか。

「そんなに慌てるな。これは、あいつの為なんだ。」

いつも以上に固くて冷たい、祖父の声が聞こえた。

「あいつって天涅の事？でも、だからってそれは……。」

天涅って、俺の話してるのか？

「言いたい事は分かる。でも、いずれあいつにも話さないといけないだろう。」

話すって何を？じいちゃんは、俺にこれ以上なにを言うつもりなんだ？

「お父さん、でも、天涅に言っちゃったんでしょ。これから赤の他人だと思えて。何でいきなりそんな事言っちゃったの？それに今回の事だって、何で急に。」

母が責めるような口調で祖父に言った。

「もう、あいつが知らないといけない時期なんだ。それに、あいつは……だから駄目だ。わしの孫だとはどうてい思えない。」

「そんな！」

「それにだ。さっき話してくれたじゃないか。お前が予想したことは多分当たっている。」

全然話が見えない。母が話したことって？予想したことって何？何で俺に関係してるわけ？

「・・・でも、そうだって決まったわけじゃないじゃない。」

「だったらお前は、あいつを育てたいのか？あいつが・・・でも？」

「それは・・・でも、後三年経てば大学生よ。大人になるじゃない。それまでは、ちゃんと育てたほうが・・・。」

「お前の考えは分かった。この話は、お前の・・・っていう予想が本当かどうか分かってからだ。」

「どうやって分かるの？」

「いろいろと方法はある。もう今日は遅いから早く寝なさい。」

「え、でも・・・。」

「いいから寝なさい。」

「・・・。」

しばらく沈黙が続いたが、はい、という母の声が聞こえた。ふすまに近づいてくると思って、慌てて居間に入って、台所に行った。

「・・・なんか、重要などこ聞こえなかったけど、立ち聞きしてたのばれたらマズそうだな。」

当初の目的通り水を飲んだ。

「ぶはー。そうとう渴いてたみたいだ。」

そして、もう一杯。やっと喉が潤された。

「にしても、何の話してたんだ？俺に関する事らしかったけど・・・。直接聞くのはできそうにないしな。ていうか、何で大事なこと聞こえなかったんだろ。すごく気になるなあ。」

「誰だ?!」

独りばやいていいると、祖父が厳しい声で叫んだ。

「お、俺だけど・・・。」

おずおずと言うと、ずんずん祖父が近づいてきた。

「こんな時間に何をしてるんだ。」

「喉渴いたから水飲みにきたんだ。」

コップを見せて言った。信じてくれそうになかったの。

「さっきの話、聞いていないだろうな。」

ぎくつとしたが、しらない振りをした。

「さっきの話って何？」

「いや、聞いてなかったらいいんだ。もう水は飲んだのか？」

そう聞かれて頷いた。

「なら、さっさと部屋に戻りなさい。」

「うん。」

そして、コップを置いて、台所を後にした。

部屋に戻って、冷たくなった布団に入った。

さっきの話し、やっぱり気になる。じいちゃんと母さんが俺の事話してるなんて。それに、嫌な感じがした。俺を育てるとかなんとか言ってたし、じいちゃんが赤の他人だと思えて言った時の話もしてた。どういうことなんだ？　そういえば、母さんの予想ってのも気になるし、それを確かめるって……。じいちゃんは一体、何をするつもりなんだ？

長々と、先程立ち聞きしてしまった母と祖父の会話の事を考えていた。しかし、結局答えなんて分からず、もっと気になる一方だった。でも、聞けない。それに、じいちゃんがいずれは話さないといけない事だと言ってたから、いつか話してくれるだろうと思って、眠ることにした。

朝になった。今日は余裕を持って起きれた。しかし、心はずしつと重かった。昨日の事が頭から離れない。いずれ話してくれるのだろうが、やはり気になる。そして、そんな気持ちのまま学校へと向って行った。

「はー。じいちゃんがからんでくると、溜息でるなあ。」

トボトボと独りで歩きながら、呟いた。そして、もう一度溜息をつ

いた時、後から肩を叩かれた。何かと思って振り向いたら、頬に指を突きつけられた。そして目の前に、

「よう、天涅。」

そう言っ、にっ、と笑う光の顔があった。

「朝っぱらから溜息か？」

「ああ、うん。なんか癖になっちゃって。」

はは、と力なく笑って言った。

「何かあったのか？天涅の周りの空気よどんでるぞ。」

「それがさ……。」

ぼつぽつと、母と祖父の会話の事を話した。

「なんか、天涅のじいちゃんって違う意味で怖いな。」

話を聞き終わってから光が言った。

「確かに光の言う通り、怖いかも。あつ、そういえば昨日どうだった？」

光のおじいさんが教育をしなোসと云って、かなり恐れてた光だったのだが、今朝はいつもどおり明るかったのでなんとなく気になった。

「ああ、昨日ね。……天涅のバカヤロー！！思い出させるなよ！なんか天涅が元気なかったからせつかく空元気を出して励まそうとしていたのに！昨日はな、じいちゃんに長々と説教されたんだ！もう、そりゃあ辛かったぜ。今思い出しても涙がでるくらいに！！」

一気にまくしたてられ、どう反応したらいいのか分からなかった。とにかく辛かったのだろう。

「あー、えーと、それは大変だったね。」

「それだけかよ！？」

ぐいっ、とつめよられて一歩あらずさった。

「えっ、それだけって言われても……。」

「もういいよ。天涅ってそんな奴だったんだな。オレがどれだけ昨日大変だったか！どうせ分かってくれないんだろ。いいさ、しよせ

んオレなんてそんなもんだもんなあ。」

遠い目をして、物悲しそうに言う光。ますますかける言葉が見つからない。

「あー、えーと・・・。」

かける言葉をさがしていると、ガラツと玄関が開く音がして、ズンズンとこちらに向ってくる足音が聞こえた。そして、あっと思った瞬間、光の頭の上に拳が叩きつけられた。

「いってー！！！！」

頭を抑えてしゃがみこんだ。

「何をしてるんだ、お前は！！家を出て行ったのはいつの話だ！！家の前で天涅君を引き止めてないでさっさと学校に行かんか！！遅刻するぞ、このバカ孫が！！！！」

近所中に響き渡りそうな声で、光のおじいさんが怒鳴った。

「う、うそ！？今何時？」

「もう七時二十分だ、バカタレ！早く行け！」

もう一度怒鳴られ、慌てて光が走り出した。俺も慌てて追いかけた。

「天涅、近道するぞ。そしたら余裕だ！！」

そして、光の後を懸命に追って行った。

「セーフ！！」

教室まで走った後光るが言った。

「ほ、本当に間に合った。良かった。」

とりあえず一息ついた。そして席に座ろうかと思ったが、自分の席が決まっていないことを思い出した。

「なあ、席ってどうするの？」

横にいた光に聞いた。

「今日からは出席番号順とか言ってたけど、オレ何番だったけ？」

「俺も分かんない。」

二人でうーんと首を傾げていたら、黒板に何か書いてあるのが目に入った。近づいてみると、そこには、四角―おそらく机―が教

室に並べてある通り書かれてあった。そして、その四角の中にはそれぞれの名前と、出席番号が書いてあった。

「なんだ、書いてあるじゃん。」

「本当だ。オレは、三番か。右端の列の、前から一、二、三番目つと。あそこか。」

教室に並べてある机を見て、自分の席を確認する光。

「天涅は？」

「俺は、二十一番。左端から数えて三列目の、一番前だ。」

「うへー、あそこか。遠いな。」

「仕方ないよ。大野に望月だし。」

光と席が遠くなって不安といえば不安だが、やはりどうしようもない。

「まあな。あつ、そうだ。隣りの奴は誰なんだ？」

黒板に向き直って、席順を見た。

「オレの隣りは斎藤か。天涅は・・・何だこれ。ひまつりって読むのか？」

俺も見してみたが、火に祭と書いてあった。やはりこれは、ひまつりと読むのだろうか。

「そうかも。ひまつりか。どんな奴なんだろう。」

「オレも気になるな。」

そんな事を考えていたら、チャイムが鳴った。あつと思って、二人で慌てて、今知ったばかりの席に座った。しかし、光の隣の斎藤はいたが、自分の隣の火祭はいなかった。まだ来ていないのだろうか。

しばらくして担任の先生が入ってきた。確か名前は、坂ノ下だった気がする。苗字までしか思い出せない。この先生は、年は四十歳だそうで眼鏡をかけていて、知的そうな顔をしていた。いかにも教師という感じだが、いまひとつこのクラスをまとめていけるかどうか、心配だった。

昨日の入学式の後、各クラスに別れていろいろ高校の話を聞いた。その時、何度も先生にねめつけられているような視線を感じた。後

で聞いたら、光もそうだったらいい。なんだか生徒を、力で押しとどめようとする人なのかと思ってしまった。まだ何も起こっていないから分らないが。

「いい加減静かにしなさい。先生が入ってきたら静かにするのは当たり前だろう。」

大体は静かになったが、まだこそそと話し声が聞こえた。しかしそこは注意せず、自分の話を進めた。

「えー、黒板の席順を見て、このとおりに座ってると思うが、二週間はこのまましていく。先生方が君たちの名前を覚えやすいようにな。それじゃあ、まず出席をとる。一番、井口友和。」

「はい。」

「二番、上野明弘。」

「はい。」

そして、次々と番号と名前が呼ばれていった。

周りを見たところ、火祭以外は全員来ているようだった。どうしたのかと思っていたら、その火祭が呼ばれた。

「十七番、火祭健吾。」

しかし反応は返ってこない。

「おい、火祭はいないのか？」

誰も答えない。先生はそれが肯定だとみたのか、席を見ていないのを確認すると、出席簿に何か書いて、次の十八番を呼んだ。

そうして、全員呼び終わった後何分か話して教室を去って行った。一時間目は八時に始まる予定なので、十分間余裕があった。

俺の隣の火祭はどうしたんだろうと思って、誰もいない席を見た。にしても、高校生活初日から遅れるなんてどういう奴なんだろう。やっぱ不良かな……。そして、なんとなく光の方を見てみると、既に隣の席の斎藤君と仲良くなったのか、笑って話していた。さすが光。付き合い上手だ。それに比べて俺は、祖父の死以降激しくなった人見知りのせいもあり、自分から話し掛ける事はなかなかできなかった。だから、一時間目までの時間を、教科書をペラペラ

眺めたり、ボーっとしたりして暇をつぶしていた。あまりにもボーっとしていたのか、周りが急に静かになった事にも気付かなかった。そしてやっと、隣の席の椅子が動いた時、はっとして音のした方を見た。するとそこには、火祭らしき人がいた。鞆を机の横にかけたし、椅子に座ったからそうだろうと思った。

火祭の見かけはやはり、不良だった。両耳にピアス。（何故か、左は一つで、右は二つ）そして、指には銀色のリング。（右手の人差し指と、中指に一つずつだった。）制服の着方もまた凄かった。ワイシャツのボタンは三番目まで開け、ネクタイはちゃんと締めずに、緩くなっていた。ブレザーは普通に着ていたが、ボタンは全部開いていた。そして何より目立ったのが、髪の毛だった。なんと、頭の天辺から下半分にかけては黒髪なのに対して、それ以降は全部金髪だった。俺は初めてみたので、あまりにも驚いて長い間火祭を見ていた。

「何ジロジロ見てんだよ。」

ギロツと思いつき睨まれた。かなり怖い目をしていた。かなりあせったが、とにかく謝らないと、と思って、しどろもどろになりながらも謝った。

「ご、ごめん。ちょ、ちよっと、火祭君のか、髪の毛が凄くなって、おもっ、思っただけだから。」

「髪？ 凄いか、コレ。」

聞かれて、ぶんぶんと縦に首を振った。

「ふーん。初めて言われた。」

かなり素っ気無く言われて、えっと固まる俺。まさか、怒らせたんじゃない・・・。

「お前、名前は？」

しかし、普通に普通のことを聞かれた。怒ってはいないらしい。

「え、えーと、望月天涅。」

「へー、天涅って珍しい名前だな。おれは火祭健吾。よろしく。」

「よ、よろしく。」

意外と普通な人なので少し拍子抜けしてしまった。でも、普通でよかった。これが中身まで不良だったらどうすればいいか分からなかったのだ。そうして俺はあさはかながら安心してしまい、火祭に話し掛けていた。

「何で、今日遅れたの？」

「ああ、その事か。からまれたんだ、あるチンピラどもに。」

「えっ……。」

チンピラにからかわれるとは、どういう状況の事をいうのか思いつかなかった。

「昨日、そいつらの頭って奴を、おれが病院おくりにしたみたいだよ。それで今朝、登校中に頭の手下共が来て、からんできたんだ。おとしまえつけろってな。」

「……。」

あまりにも、俺の現実とかけ離れた事を聞いている気がして、何もいえなかった。

「どうした？ボーっとして。」

「……い、いや、何でもない。でも、けがとか全然してないけど、大丈夫だったの？」

「ああ、それなら全然平気。頭の手下なんて弱いのはっかだから。でも人数が多くて、全員叩きのめした後にはもう時間が過ぎてたってわけ。」

凄い。よくわからないけど、凄いと思った。

頭の手下がどれだけ弱いのか分からないが、俺なんてひとたまりもないだろう。なのに、かすり傷一つ無く、倒しちゃうなんて凄すぎる。

「火祭君って凄い……。」

思わず、口からもれていた。

「凄い？そうか？周りの奴らは皆、ひいてるけどな。」

火祭君が、周りを見回して言った。俺も見ても、前の席も、後ろの席も、両隣の席も、誰も座っていなかった。ひとつ列を空けて

座っていた。それに、先生が来たときみたいに静かだった。

「な。おれかなり嫌われてるから。天涅もおれなんか話し掛けるなよ。嫌われるぞ、他の奴らに。」

「火祭君……。」

何で、皆が嫌うのか分からなかった。ちゃんと忠告までしてくれて、自分から俺を遠ざけようとしている良い奴なのに、何でだろうと思った。

「あ、あのさ、何で皆嫌ってるの？火祭君、悪い奴じゃないみたいなのに。」

「え？おれが悪い奴じゃないって？そんなこと言うの、天涅だけだぜ。あれっ、もしかしておれの噂とか聞いてなかったり？」

「噂？」

「ああ。誰が最初に言ったのか知らないけどな、ここら辺じゃあかなり広まってるんだぜ。おれが、警察もつかつに手が出せない、かなりの権力と力を持ったやくざの一員だって。」

どこかで聞いた事があるやくざだなと、思ったら、光のおじいさんが元組長をやっていたやくざだという事を思い出した。でも、まさかそのやくざが中高生を組員にするなんてことはありえないと思った。光のおじいさんが元組長だといっても、今も権力はあるらしいし、あのおじいさんは道理は中々ある人だから、子供は組員にいないと思う。

「それに、今まで盗みとか罪を犯して少年院に行ったことがあるとか、いろんな噂が立ってたんだ。」

「でも、それは噂でだけでしょ。」

「いや、それが少年院に行ってたって事は事実なんだ。」

「えっ！！」

「実はおれ、夜の街をぶらぶらしてたんだ。そしたら、どういうわけか知らないけど、手に金属棒とか持った連中が一人の人をよってたかって殴ってたんだ。それ見たら我慢できなくて、そいつら全員叩きのめしてた。気付いたらやられてた人はいなくなっていて、警察

が来てさ。事情話したけど、ちよつとの間は少年院入っつけて言われたから仕方なく入ってたわけ。それがどういうわけか変な噂になったんだ。」

「・・・・・・」

「本当の事聞いてもひくだろ。」

俺の沈黙をどうとったのか、火祭君が言った。

「別に俺はひいたわけじゃないよ。ただ、凄くなって思っただけで。普通だったら見てみぬ振りするのに、全員叩きのめすなんて、凄いや。」

正直に、思ったままに言った。火祭君が怒るといけないからとか、そんな事は考えずに自分が感じた事を言った。

「お前・・・・。変な奴だな。」

そう言つて、ハハハハと笑った。

「え、ちよつと、変な奴つて何！？俺なんか変な事言つた？」

なんだか笑われているのが恥ずかしくなった。ていうか、こっちは正直に言つたのに、何故笑う！？

「だ、だってよう、普通ああいふ話聞いて凄いとかって思うか？思わねーだろ。本っ当におもしろいな、天涅つて。」

バシバシと背中を叩かれた。かなり痛い。

「や、やめろつて。い、痛い、痛い！！」

「おっと、悪い、悪い。まさか、天涅みたいな奴がいるとは思わなかったぜ。」

ニツと笑つて火祭君が言った。やはり、人は見かけでは判断できないと言う事がまた分かった。第一印象では、こんな風に笑うなんて想像もできなかった。だけど、少しでも話してみても、火祭君が皆から嫌われるのではなく、本当は好かれるタイプなのだと思った。なのに、噂のせいで周りの人たちはひいてしまつて逆に嫌われてしまっている。なんだか、もったいない気がする。それに、辛いんじゃないかと思つた。

でも、今ちゃんと笑つたし、周りの人たちだつて気付いたはず。本

当は噂みたいな人じゃないんだと。そうだったらいいと思う。初対面なのにここまで相手の事を、考えられるなんて、今までの俺じや有り得なかった。でも、ちょっと話し掛けただけなのに、ここまで話が広がるとは。もしかしたら、この街の人柄のせいなのかもしれない。光にしたって、火祭君と同じように少ししか話してないのに仲良くなれた。でも、なんだか二人ともタイプが似てるのは何故だろう。まあ、そこは気にしないようにしよう。

しかし、周りの態度は変わりはいなかった。かなり火祭君を恐れているようだった。そして、火祭君と仲良く（周りにはそうみえていだろう。）話していた俺までも、恐れられるようになった。しかし、その事を知ったのは、光が教えてくれたからなのだが。

「なあ、天涅。火祭ってどうよ。すっげー悪い噂流れてるけど。」
休み時間、火祭君がいない時に光がやってきて言った。

「ああ、それただの噂だよ。本人は違うっていつてるし。それに、火祭君良い奴だよ。」

「ええっ、マジで！？おっかしーなー、極悪非道だって聞いたのに。天涅がたぶらかされてるんじゃないかって皆言ってるぜ。だからオレ心配になってさ。」

「そんなことないよ。火祭君来たら、話してみるといいよ。やっぱ人って見た目だけじゃ分かんないだなんて思ったし。」
うんうん頷きながら言った。

「でもさ、天涅まで恐がられてるぜ。」

「え？でも、火祭君は良い奴だと思っし、噂と見た目だけしか判断しない皆が間違ってるんだ。」

「よく言ってくれた、天涅。」
すると、いつ戻ってきたのか、火祭君がいた。

「あ、火祭君。」

「本当にお前だけだ、おれの事そんな風に言ってくれるの。」
ポンポンと肩を叩いてきた。しかしその手を、光がはじいた。
「おい。お前、皆が噂してる事は本当にただの噂なんだな。」

睨むようにして、火祭君を見て光が言った。

「ちょっと、光。」

「天涅は黙っててくれ。真剣に聞いてんだ。なあ、どうなんだよ。」
火祭君から視線をはずさずに言った。

「周りが噂してるのは、本当に噂でしかない。」

きっぱりと、火祭君が言った。すると、光が睨んでいた視線をやわらげた。

「分かった。お前のこと信じよう。オレは大野光。天涅とは春休みからの友達。」

「なるほどな。どうりで仲良くしゃべってるわけだ。おれは、火祭健吾。知ってると思うけどな。なあ、にしても、光強そうだな。」

「よく分かったな。さすが火祭。あ、言っとくけどオレ、お前の噂学校ではじめて知ったぜ。」

「え、ウソ。」

驚いたように火祭君が言った。

「ウソじゃないぜ。なあ、天涅。」

「うん。でも、俺この前引越してきたばかりだし。」

「え、そうだったのか!？」

また驚く火祭君。

「初めて聞いたから、直接確かめようと思ってさ。お前が噂と違う奴でよかったぜ。」

「おれも、噂を信じてない奴らがいて良かったぜ。」

ニツと、口端をつりあげる笑い方をして火祭君が言った。その言葉を聞いて、なんだか嬉しくなって自然に笑みがこぼれた。

「おっ、天涅もちゃんと笑うんだな。」

「えっ？」

「なんかおどおどしてる感じだったから、良い奴なんだけどなーって思ってたらちゃんと笑うんだな。」

「天涅ってこういう奴なんだ。他の人とは変わってて、おもしろい
だろ。」

「ああ。おもしろいよな。」

そして、二人でアハハハと笑いあった・・・ってちょっと待て。なんで俺の事なのに、意気投合して笑い合ってるんだ!?

「ちよっと二人供、他の人と変わってておもしろいって、どういう意味だよ。」

「まあまあ。どう意味だっていいだろ。とにかく、天涅は良い奴だし、一緒にいてあきないって事なんだからよ。なあ、火祭。」

「ああ。」

なんだかますます息が合ってきたような・・・。

「なんだよ、二人して。」

ぷいっと横を見た。すると、一列向こうの誰かと目が合った。すぐそらされたが。やはり、まだまだ火祭に対する態度は変わらないらしい。でも、どうやら注目だけはされているらしかった。周りを見回すと、何人かと目が合ったので、こっちの事が気になるのだろうと思った。確かに、遠巻きにしていた奴にいきなり話し掛けて仲良くなる奴らっていうのも、気になるのだろう。それに、笑ったりしているのだから話の内容も気になりそうだ。

「おい、天涅。どうしたんだ? またボーっとしてたぞ。」

火祭君が心配そうな顔をしていた。

「あ、ううん。なんでもない。」

そう言っって首を左右に振った時、チャイムが鳴って先生が入ってきたので、慌てて光が席に戻って行った。そして、俺と火祭君も教科書を机の上にあたふたと出した。先生がすぐ授業を始めたためたので、眠くなりそうだが気をつけないと思って、ペンを握った。

「じゃあ、また明日な。」

放課後、教室で火祭君と別れた。どうやらバイトをやっているらしい。

「オレ達も帰るか。」

「うん。」

そして、光と一緒に教室を出た。

「なあ、オレン家こいよ。知り合いに貰ったおいしいクッキーあるんだ。」

「うん、行こっかな。」

ということ、光の家に行き直した。

「ただいまー。」

「邪魔します。」

そうやって、光の家の中に入った。

「あれ、この靴はてっさんか？」

玄関には、革靴が一足きれいに並べられていた。

「クッキー全部食べてなきやいいけど。」

眩きながら居間に向かう光の後に続いた。

そして、居間に入ると光の言ったとおりでっさんがいた。

「あ、やっぱり。てっさんだった。」

「おお、お帰り光。天涅君も一緒か。」

「久しぶりだな。」

光のおじいさんと、てっさんに言われ、とりあえず邪魔しますと言っておいた。

「あ！やっぱりクッキー食べてた。しかも残り二つだし。」

さっと、テーブルの上ののっていた缶の中からクッキーを二つ取り出した。

「丁度良かったじゃないか、二つあって。」

「二つしかないだろ。ほら、天涅。」

「ありがと。」

光の手から一枚貰った。

「学校はどうだった？」

てっさんが聞いてきたので、今日あった事を光と一緒に話した。

「まあ、そういうわけで、火祭っていう友達第一号ができたんだ。」得意そうに光が言った。最初に火祭君と話したのは俺なんだけどね。

「そうか、あいつと友達にねえ。」

てっさんが意味ありげに言った。

「ちよっとまって。てっさん、火祭の事知ってんの？」

「何言ってるんだ、光。健吾君はてっさんの息子じゃないか。」

当たり前言うおじいさん。

「ああ、なるほど。てっさんの息子……ってえー！？てっさんって子供いたの！？」

「何で光が知らなかったんだよ。そっちの方がビックリだって。」

「だ、だって、今まで見た事も、会った事もなかったんだぜ。分かる訳ないだろ。なあ、てっさんどういうことだよ。」

「落ち着け、光。ちゃんと話すから。」

そして、てっさんが火祭君と関連することを話し始めた。だが、出だしがこのヤクザの一員になるところからだだったので、全部聞き終わるまで時間が掛かった。なので、簡潔にまとめると…。

てっさんは、ある女性と結婚したのはいいが、その女性が早くに亡くなってしまった。けど、火祭君を産んでからだった。男手ひとつで育てるのはいいが、てっさんはヤクザの一員、それに収入も少なすぎて火祭君を育てるのが大変になった。そして、光のおじいさんに相談したところ、おじいさんも光を拾ってきたので境遇は同じ。おじいさんに、お前が頑張らなくてどうするんだと叱咤され、火祭君を育てることをもう一度決心する。そして、火祭君が幼い頃、てっさんはヤクザを一旦やめる。どうやら、火祭君がヤクザの子供だと噂を立てられないように、高校卒業するまではこの道から出ようと思ったらしい。でも、火祭君はヤクザだった父親の方がよかったらしく、幼稚園でも、小学校でも言いふらしていた。それで、てっさんは火祭君が中学生になった頃、またヤクザの道に戻ってきた。でも、その時には、おじいさんもとくに組長を辞めていたし、この家に来る時は一人できていたので、光と火祭君は会えなかったというわけである。

「いやあ、運命って恐いな。」

光が、話を聞き終わってから言った。

「なんだ、光、運命って。」

てっさんが呆れたように言った。

「だって、オレとあいつは会えなかったかもしれないのに、高校に入って同じクラスでやっと会えたんだぜ。これは運命だろ。」

「いや、宿命かもな。」

にやっと不適に笑って、おじいさんが言った。

「どういう事だよ。」

「健吾はな、強い相手を見ると倒さずにはいられないっていう困った点があるんだ。」

困ったようにてっさんが言った。

「マジかよ、それ。」

「そういえば、光の事見て強そうだなって言ってた。」

「それは冗談だろ。」

笑って言う光。

「光、気をつけろよ。明日ぐらいにでも決闘申し込まれるかもな。そのてっさんの言葉に笑いをなくす光。」

「ま、まさか。決闘なんて。そんな事するわけ……。」

「火祭君、本当にしたりして。」

俺がボソツと言った事を気にして、ますます本気にする光。

「あ、天涅まで。なーに言ってるんだよ。……でも、火祭ならあり得たりして……。」

光が真剣な顔で言った時、おじいさんとしてっさんが大笑いをした。ここで俺もあれはウソだった事に気付いて、つられて笑った。

「な、何笑ってんだよ！」

「アハハハハ、バカだな、光は。」

「うるさい！笑うな、じじい！」

おじいさんに怒鳴るが、敵う訳がない。近くにあった孫の手でバシツと叩いた。

「いたっ！！」

「天涅君も冗談だってわかってるじゃないか。大体、今時のガキがそんな事するわけないだろ。」

「くそー！なんかムカツク！！」

悔しくて地団太を踏む光。なんか笑えたから、アハハハと声を出して笑った。

「天涅も天涅だろ！何であんなに本気っぽく言うんだよ。信じただろうが。」

「だって、一瞬本当にやるかもって思ったからつい。」

「はー、もう。何でオレってこんなにからかわれるんだろ。悲しくなってきた・・・。」

がっくりと項垂れる光を見て、また笑った。家の中が笑いに包まれた。だが、その笑いを、光の怒鳴り声がかき消した。

「笑うなー！！」

しかし、またすぐ、笑いはおこるのだった。

そして、俺はしばらくしてから家に帰った。気分が良かったから、思わず鼻歌まで歌っていた。しかし、家の前まで来て、今朝のことを思い出した。母と、祖父の会話。何を話していたのか分からないが、あまり良くない内容なのだと思う。それに、いずれ俺に話すとか何とか言っていた。それが今日なのかもしれないと思うと家の中に入るのが億劫になったが、一步一步進んで行った。そうじゃないと、逃げ出すように光の所へ戻りそうだった。でも迷惑はかけられないのでそんな事はできない。しばらく家の前に立ちすくんでいたが意を決して家の中に入って行った。

しかし、幸か不幸か今日は祖父からの話しとやらは特に何もなかった。だが、母がわざと目を合わせないようにして、俺を避けていた。夜中の会話が原因なのだろうが、一体何を話していたのだろうか。不安は募るばかりだった。

七

「ハア、ハア、ハア・・・。」

どうやら自分は走ってきたらしい。息が上がっている。

「ここはどこ？何で暗いんだ？」

周りを見回しても何も見えなかった。ただ独り、暗闇の中に立ちすくんでいる。

しかし、真直ぐ前を見詰めると、白い一点の光りが見えた。迷わずその光りに向って歩いた。だんだんと光りに近づいて行く。いや、近づいていっているんじゃない、光りの方が近づいて来ているんだという事に気付いた時、辺り一面白一色に包まれた。眩しいと思つて目をつぶった。

薄っすらと目を開けると、自分の周りを忙しそうに歩いている人達がいた。よく見てみると、看護婦だった。病院か、と思つて辺りを見回した。

前を向くと、目の前に病室のドアがあった。誰の病室かはすぐに分かった。毎日毎日お見舞いに來たから、このドアノブの下辺りについている斜めについた、小さな傷だつてよく覚えている。そう、この中には祖父がいる。あの優しかった祖父が。このドアの向こうにいるんだと思ったら、今すぐ会いたくなった。そして、ドアノブに手をかけた。だが、中から家族の声が聞こえてきた。

「じいちゃん、まだ死んじゃ駄目だよ！」

妹の声がした。

「こら、咲。そんな風に言うなよ。じいちゃん、頑張つて！まだまだ長生きしないと！」

妹をたしなめて、祖父を元氣付かせる為の、弟の声がした。

「お父さん、頑張ってください！これから、子供達が大きくなつていくんですから。これからじゃないですか！」

必死に言う母の声。

「親父……」

言葉が続かないのか、父が呟く声が聞こえた。

そう、聞こえただけ。自分は、病室に入らず、ただドアの前で突っ立っている。足が、全く動かない。行かなきゃと思っているのに、足が動かない。いや、本当は行きたくないとも思ってる。だって、中に入ったら、じいちゃんの辛そうな顔をみないといけないじゃないか。それに、俺の顔を見たら、安心して成仏しちゃうかもしれないじゃないか。絶対に見たくない。そんなじいちゃんの姿を見たくない。ドアを見るのをやめて俯いた。その時、勢いよくドアが開いて、父が出てきた。眉をよせ、口を固く結んでいた。怒るときの顔とはちよつと違ったけど、恐かった。

「天涅、何で来ないんだ！じいちゃんが呼んでるじゃないか。早く入ってくるんだ！」

必死の表情だった。でも、俺は首を横に振った。足も動かないし、今のじいちゃんを見たくないからと心の中で何度も言った。しかし、父は言い続けた。いいから、中に入ってきてくれ。お願いだ、と。それでも俺は、首を横に振り続けた。

ピ——…

それからしばらくして、病室の中から人間の死を告げる、事務的な機械の音が聞こえた。

「あ……親父……」

そういう父の声が頭上から聞こえた。

自分はただ、ドアを見ていた。

ザー、ザー……

雨、降ってるんだ。

眠りから覚めた時、最初にそう思った。

雨のせいで外が暗く見えるけど、もうとっくに起きる時間らしい。

鳴り始めた目覚し時計の音を止めて、のろのろと布団から出た。部屋の中がじめじめしていて、体が重い気がした。

カーテンを開けて外を見ると、雨が激しく降っていた。

「はー。ー。」

いつも以上に、重々しくて長い溜息が出た。あんな夢見るなんて。朝から気が重い。

じいちゃんが息をひきとる前の事は、今思い出しても胸が苦しくなる。自分が悪かったのだとちゃんと分かっているからこそ、辛い。最近、光と火祭君と仲良くなれて、楽しいと思える日々を送っているのに、あんな夢をみるなんて。もしかしたら、あの事も影響しているかもしれない。昨日の夜中、母と祖父が話していた事が、精神的に重くのしかかっているのだろうか。

雨ってだけでも嫌なのに、夢のこと等いろいろ重なって、朝からかなりへこんでしまった。果たして、今日一日が無事に終わるだろうか・・・。

「よう、天涅。」

学校の中央玄関の前で、傘をたたんでいる時、光に声をかけられた。

「おはよう、光。」

「どうしたんだよ。元気ないじゃん。」

「雨の日って嫌いなんだ。」

制服もびしょびしょだし、鞆もぬれてしまって良い事など何もない。

「それで元気ないのか？」

「それだけじゃないけどさ。」

そして、今日の夢のことを話した。

話し終わった時には、すでに教室の真ん前だった。

「なるほど。そりゃあ、朝からへこむよな。」

「まあね。」

「でも、そんなのすぐ忘れろよ。人生、谷があれば楽だってあるんだし。早く元気だせよ。」

そして、自分の席に行った。

「楽、か。あるかな、今日は。」

そう呟きながら、俺も席に行った。

自分の机の上に鞆をのせて、ふと隣りの席を見た。しかし、そこには誰も居なかった。まだ火祭君は来ていないらしい。今日も遅刻だろうか。そう思った時、肩をだれかにつつかれた。振り向くと、白いタオルを頭からかぶり、顔を覆っている人物がいた。

「おはよう、火祭君。：何でタオルかぶってんの？」

そう言うのと、ぱっとタオルをとって、不満そうに言った。

「なんだよ、驚けよ。ていうか、そんなにすぐ当てたらつまんねーじゃんか。」

「だって、タオルから髪の毛見えてるし、そういう事するの火祭君しかないし。」

「どうしたんだよ、天涅。かなりノリ悪いじゃん。」
椅子に座って言った。

「いや、ちよつと。雨が嫌いだからさ。」

「ふーん。そうなのか。」

そう言って、ゴシゴシと髪の毛を拭いた。

「濡れたの？：全部びしょびしょだけど。」

上から下を見たら、雨に濡れたせいなのか、制服がびしょびしょになっっていた。

「それがよう、ここに来る途中で傘が途中で風に吹き飛ばされたんだ。しかも道路のど真ん中。したら、その時丁度でっかいダンブが通って傘がペシャンコに潰れてどうしようもなかったから走ってきただ。そしたら、全身びしょぬれ。」

ちなみにタオルは、学校の中入ったら先生に見つかって、怒られてから保健室で貸してもらったんだ。おれってついてるのか、ついてないのか分かんねえよな。」

ハハハ、と気楽に笑う火祭君。楽天的なのか、天然入っているのかよく分からない。

「寒くないの？」

「へーき、へーき。実は保健室のストーブであったまってきたんだ。」

保健室の先生、おぼさんだけど結構優しいぞ。やっぱ保健室の先生はああでなくっちゃ。

あつ、もうすぐ授業始まるじゃん。天涅。一時間目の授業何だ？」

「えっ、えーと、数学。」

「数学、すうがく、すーがく、すーがーくー？」

ガサゴソと鞆の中を探しながら、何故かだんだん数学の言い方が伸びていった。どうしたのかと思っていたら、顔を上げた。

「やばっ、数学忘れた！！おれついてねー。悪いけど、見せてくれ天涅。」

あちゃーという顔をして、火祭君が言った。

「うん。なんかついてないね。」

「そうだよなー。」

そして、数学の教科書を出そうと引出しの中を探した。だが…。

「ない！？何で！！」

「え、マジで？天涅もないのかよ。」

「ど、どうしよう…。」

他のクラスに知り合いなどいるはずもないので、借りる事もできない。

「ついてないな、おれら。」

「うん。」

「はー。」

二人で深々と溜息をついた時、チャイムが鳴った――――

「アハハハハハハハ！！」

休み時間、光の笑い声が響いた。

「笑いすぎ！！」

俺が言うと、

「そうだぞ、光。調子に乗るな！」

火祭君も言った。

「だ、だって、普通間違えるか？明日の時間割と。昨日確認して自

分で準備したのに。ハハハハ、ありえねー。」

そうなのだ。一時間目は数学ではなく、国語だったのだ。俺があの時見間違えて、隣に書いてあった金曜日の時間割表を見ていたのだった。

「うるさいなー。」

抗議の視線を、火祭君と二人で投げかけると、さすがにひるんだのか、光が笑うのをやめた。

「まあ、良かったじゃねーか。国語はちゃんとあったんだし。でも、本当についてるのか、ついてないのか分かんないな、二人とも。」

「二人ともって、天涅なんかあったのか？」

光には、火祭君のことを話したから知っていたのだが、俺の事を聞いている火祭君が、聞いてきた。

「天涅、話していいか？」

「うん。二回も言いたくない。」

そして、光が今朝の夢の事を、火祭君に話してくれた。

そしてこの話から、俺の母方の祖父の事や、話がふくらんで光が捨て子の事や、拾ってくれたおじいさんの事などを話した。そして、光のおじいさんが元ヤクザの組長、しかもそのヤクザが、火祭君のお父さんが入っているヤクザだという話になった時には、三人で盛り上がってしまった。

でも、よく考えてみたら、周りにいて聞こえてしまったクラスメートはかなり驚いていたと思う。いや、納得してたかも。火祭君の噂が本当だったって事にならなきゃいいけど。まあ、なったところで火祭君は大丈夫だと思う。その事を本人に言ったら、天涅と光がいるから大丈夫。お前らといたら楽しいからと言っていた。俺もそうだ。光と、火祭君といたら楽しい。一緒にいる時だけは、嫌な事全部忘れられる。久々に、友達というものを味わっている気がする。でも、甘えないようにしなくては。俺の問題は、俺が解決していかないといけないのだから。

「おっ、雨止んでるぞ。良かったな、火祭。」

「ああ。これで心置きなくバイトに行けるぜ。じゃあな。」

ひらっと手を振って走っていった。

「あいつ、やっぱてっさんに似てるとこあるな。」

そんな火祭をみながら光が言った。

「そうかな？」

「うん。オレ今日見てて、すっげー感じた。」

「へー。さすが。」

そして、てっさんと火祭君の似ているところを聞かされ、ちょっと話の方向が変わって、てっさんの色んな事を聞かされた。帰り道の間中ずっと光は話していた。よほどてっさんを気に入っているのだろう。

「天渥、今日も家によってくか？」

光の家の前で引きとめられた。

「ううん、今日はいいや。また雨降りそうだし。」

雲行きを見ると、晴れていた空にだんだんと黒雲が浮き出していた。遠くの方で雷も鳴っていた。

「そっか。天渥は雨嫌いだもんな。」

「また今度行くよ。じゃあ、明日学校で。」

「じゃあな。雨降らないうちに早く帰れよ。」

「うん。」

そして、光に背を向けて歩き出した。

光に言われたとおり、雨が降る前には早く帰りたいのだが、楽しい時間が終わって、これから辛い家に帰るとなると、歩みが遅くなるのだった。

家に帰ると、家族の雰囲気はいつも通りだった。祖父は無視を決め込んでいるし、母は昨日のままで、俺と目を合わせないようとはなかった。弟は相変わらずつつけんどんに物を言ってくるし、父は父で俺とあんまり関わらないようにしていた。妹だけは、何の躊躇いもなく接してきた。何も分かっていないといっても、独りだけ

普通に接してくれているのだから有難かった。

夕食を食べた後、自分の部屋に行って宿題をしていると、妹が部屋に入ってきた。

「天涅兄ちゃん。じいちゃんが呼んでるよ。」

「えっ、じいちゃんが？」

ドキッとした。とうとうあの時の話しが聞けるのだろうか。

「分かった。今行く。」

椅子から立ち上がって、部屋を出た。妹はそのまま自分の部屋に行くのかと思ったが、一緒に階下に下りてきた。

「じいちゃんね、天涅兄ちゃんに話があるって言ってたんだけど、全員居間に来いって言ったんだよ。おかしいよねー。」

階段の所で、妹が言った。確かにおかしい。俺の事なのに、全員集める必要はないだろう。なのに、そうする必要がある？ ということなんだ。一体、あの時母と祖父は何を話していたんだ？

いろいろ考えながら、居間のふすまを開けた。その瞬間、部屋の雰囲気の変更に気付いた。部屋の中にいる全員が、険しい顔をしていて、そのせいか張り詰めた雰囲気になっていた。足を一歩踏み出すのに躊躇した。

「早く入ってきなさい。」

厳かに言う祖父の声を聞いて、足が勝手に一歩一歩前に進んだ。

「そこに座りなさい。」

テーブルをはさんで、祖父の目の前を指された。ちなみに、テーブルの左の方には弟と妹が、右の方には父と母が座っていた。

「天涅。お前が知っておかないといけないことがあるんだ。」

祖父が、真直ぐこっちを見て言った。

「いいか、この話を聞いた後、どうするかはお前の勝手だ。つまり、家を出て行くか、このまま居続けるかってことだが。」

「えっ、どういう事…。」

いきなり家を出て行くかどうか聞くなんて、まるで俺が居候みたい

じゃないか。そう思ったが、口には出さず、祖父の話しを聞くことにした。

「いいからとりあえず聞きなさい。これから話す事は、冗談でも何でも無い。それに、全て真実だ。」

そうして、とうとう祖父の話が始まった。

「まず初めに言っておく。お前は、ここに居る父さんと母さんの、実の息子ではない。」

俺は、間拔けな面だと分かっているが、口を〇の字に開けていた。今、何て言っただ…

その事だけが頭の中を回っていた。

「じ、じいちゃん！それ本当なの！？」

妹が言ったのが聞こえた。それに、黙って頷く祖父。

「知らなかった…。和也兄ちゃんは知ってたの？」

何も言わない二番目の兄に聞いた。

「まさか。俺も知らなかったよ。でも、ちょっと納得かな。」

「何で？」

「だってさ、兄貴って言ったって似てるとこなんて全然なかったし、こんな腑抜けなのが兄貴なんて思えなかったんだから。兄貴じゃないって分かってほっとしたぜ。」

冷たく言い放った。俺は、〇の字に開いた口を閉じて弟を見た。

「ひどいよ、和也兄ちゃん。天涅兄ちゃんだって、アタシのお兄ちゃんだもん！じいちゃんが亡くなる前だって、一番優しかったのは天涅兄ちゃんだったもん！そうだよ、天涅兄ちゃん！」

目に涙を溜めながらも、力強く言ってきた。

「咲…。」

俺は何もいえなかった。妹に優しくしたなんて、胸を張って言えなかった。あの時は、じいちゃんに嫌われたくなかったから、じいちゃんが弟と妹には優しくしないといけないって教えてくれていたからそうしたのであって、決して妹の為ではなかった。

「咲。とにかく天涅は、咲のお兄ちゃんじゃないんだ。これは事実

なんだからな。」

祖父が優しく諭すように言った。でも俺には、刺の刺さった言葉にしか聞こえなかった。

「でも、本当のお兄ちゃんじゃないって言ったって、今まではちゃんと一緒に暮らしてたんだよ。だから、天涅兄ちゃんはずっと、アタシのお兄ちゃんだもん！」

ぽろっと、一滴涙が頬を伝った。

「咲、何で泣くんだよ。咲がそう思ってるんだったらそれでいいじゃん。」

「だって、和也兄ちゃんはそう思ってないでしょ。だったら、天涅兄ちゃんが可愛そうだよ。」

目をゴシゴシ拭きながら妹が言った。まさか妹がこんな風に言ってくれるだなんて、思ってもいなかった。嬉しかったが、同時に辛かった。祖父が亡くなって以来、妹には全然かまってあげなかった。たまにひどい事も言った気がする。それなのに、こんな風に言ってくれるなんて、妹はまだ純粋で可愛い。自分のことしか考えていなくて、じいちゃんの死以降、自分の殻に閉じこもっていた自分が恥ずかしかった。

「咲。俺、お前に何もしてやれなかったのに。」

自然と口から出てきた。これが正直な気持だった。

「ううん、天涅兄ちゃんはいっぱいしてくれたよ。じいちゃんが亡くなってからちよつと冷たくなっただけど、でも天涅兄ちゃんは優しいもん。ねえ、出て行かないよね。」

さっきゴシゴシと拭いたせいで、少し赤い目をこっちに向けて聞いて来た。

「それは…。」

答えられなかった。出て行く、出て行かないは、多分俺が決められるんじゃない。祖父は、俺の自由とかって言ってたけど、きっと妹以外は出て行ってもらいたいはずだ。それを考えると、出て行かざるを得ない。

「天涅兄ちゃん？」

言葉が続かない俺を見て、心配気な顔をした。

「咲、悪いがまだ話があるんだ。」

祖父が言った。妹は、俺から目をそらして、祖父の方を見た。

「天涅がどうやって、この子供になったかという事なんだが。

初めは一時の間だけ、お前の母親が預かることになったんだ。お前の本当の母親が、病弱で、しかも双子を産んでしまったからせめて一人だけでも預かってくれないかと言ってきた。しかし、何日待っても迎えには来なかった。おかしいと思って電話をしてみたが、全然通じなかった。そして、しばらくして手紙が来た。そこにはな、もう一人では耐えられないからお前を迎えにはいけない。もう一人の子供も手放すと書いてあったんだ。なんて酷い母親じゃないか。結局、お前は捨てられたんだ。実の母親にな。父親はどうしたんだと思うだろ。元々いないんだ。お前の実の母親は、結婚してもいないのに子供ができて、相手の男は逃げ去って行っちゃったわけだ。つまり、お前は私生児なんだ。それなのに、お前の父親と母親はちゃんとお前を育ててくれた。感謝すべきだろう。

でもな、お前は恩をあだで返したんだ。むこうのじいさんに、かわいがってもらっていたらしいな。それなのに、あんな事をするとは。そのせいでお前を育ててくれた父さんと母さんに迷惑をかけた。最低の奴だ、お前は。」

プチッと何かが切れる音がした。そして、熱いものが喉元に広がった。次の瞬間、俺は今まで出したこともないような大声で怒鳴っていた。

「黙れ！！」

その場が静まったのが分かった。だが、俺は冷静さを失っていた。

「お前に何の関係があるんだ！俺を育ててくれたのは、父さんと母さんで、かわいがってくれたのは天国にいるじいちゃんだ！お前は初めから俺を毛嫌いしてたじゃないか！赤の他人のお前に言われる筋合いは無い！」

椅子から立ち上がって、目の前の相手を睨みつけながら言った。

「なっ、何を生意気な。言っておくが、さっきわしが言ったのは、お前を育ててくれた父親と母親も思っている事だ、そんな事も分かんのか!!」

そうだった。俺は、父さんにも母さんにも憎まれていたのだった。

それでも、確かめる為に、父さんと母さんを見た。

「そうなの？父さんと母さんもそう思ってるの？」

しばらく沈黙があった。そして、父さんが口を開いた。

「ああ。その通りだ。」

俺は目を見開いて、父さんを見つめた。

「母さんも？」

父さんの隣で肩を震わせていた母さんが、ビクツとして、のろのろと顔を上げた。目が合った。その目は、何かに怯えているようでもあり、疲れているようでもあった。俺の事できつと苦しんだんだろうな。心の隅でそう思った。そして、母さんは言った。

「天淫、ごめんなさい。あなたが成人してから伝えれば良かったのに。でも、もう我慢できなかったの。あなたの事で、お父さんと、修一さんに責められるのは。ごめんなさい。」

母さんは、辛い表情をして俯いた。そして、小さな声で何度も、ごめんなさいと繰り返した。そんな母さんを見ていられなくて、目をそらして言った。

「母さんが謝らなくてもいいよ。俺が、悪かったんだから。俺：この家出て行くから。」

そして、居間を飛び出し、玄関に向かった。外は雨が降っていると分かっていたが、傘も持たずに飛び出した。庭を突っ切る時、チャコが吠えたが、気にもとめず走って行った。行く当てなどなかった。もう、誰にも迷惑はかけられない。

とにかく走った。雨脚が酷く、どんどんずぶ濡れになっていった。髪も、服も、靴も、全部濡れていった。俺は、幾度となく滑りながらも走り続けた。もう、何をしているのか、何故走っているのかな

んて分からなかった。

随分走ったと思った時、息が切れてきた。足ももつれて、近くの電信柱にもたれ掛かってその場にしゃがみこんだ。

ハアハアと荒い息を吐いた。体全体が、鉛のように重かった。

―お前は、ここにいる父親と母親の、実の息子ではない。

―結局、お前は捨てられたんだ。実の母親にな。

―お前は恩をあだで返したんだ。

―最低の奴だ、お前は。

考えまいとしていたのに、祖父の言った言葉が次々と浮かんできた。唇を噛みしめた。

そして、母さんの言った事が浮かんできた。

―もう我慢できなかったの。あなたの事で、お父さんと、修一さんに責められるのは。ごめんなさい。

辛かった。父さんとじいちゃんに責められている母さんを想像すると、辛かった。

俺は初めからいてはいけない存在だったのだ。生きていてはいけない気がする。

誰か通りかかって、ナイフで一刺ししてくれないかな。ニュースだったら、こんな事件いくつもあるのに。あ、なんだったら自殺でもしちやおうか。近くに刃物でも：都合よくないか。だったら、このまま雨に打たれていたら死ねないかな。朝までずーっとここにいたら、雨が体温を奪って俺を殺してくれないかな。なんだかぼーっとしてきたなあ。目の前も霞んできたし、もしかしてこのまま死ねるかも。

すると、だれかが歩いてくる音が聞こえた。もしかして、本当にナイフで一刺ししてくれる人が通ったりして。薄れていく意識の中でそう思った。

そして、その足音は俺の前で止まった。

「ん？こんなところに誰かいるのか？」

それは、聞き覚えのある声だった。まさか、幻聴？かとも思ったが、

そうではないことがはっきりした。相手が、俺の名前を呼んだからだった。

「天涅君！」

本当にてっさん？しかし、俺は物を言う気力すらなかった。

「何でこんな所にいるんだ！？おい、しっかりしろ！」

何でいるんだっけ？覚えてないや。でも、いいんだ。どうせ俺は、死ぬんだから。

そうして、だんだん意識が遠のいていった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3872e/>

暗き闇夜に差す光2

2011年10月5日00時29分発行